

# 異本天神記への探求

菅丞相舟路の道行

細川景正

菅公に關する筑後掾の語物は、從來正徳三年、近松の天神記一篇に終始するが如く傳へられてゐるが、幾多の會我物語が次々に上場されてゐる例に徴しても、彼が晩年に及ぶまで史中著名の事蹟であり、且つ大阪町民が渴仰の中心對象とするこの天満宮の縁起を等閑に附したと思へようか。

延寶八年刊、宇治加賀掾の大竹集に虎卷菅丞相・亂曲といふのがある。飛梅の奇異や、柘榴天神の傳説を綴り合せた景事曲で、その正本、天神御本地に關係があるらしいが、内容の類するものに義太夫正本、大友眞鳥・第五菅丞相傳記といふ景事曲がある。井上播磨掾傳來の語物で、享保二十年、二世義太夫が上總少掾を受領した際の祝儀曲、天神記冥加松梅は全くこれに據つてゐる。播磨掾の正本に貞享元年板があると聞くが、それは寧ろ義太夫の上場時に關聯するやうに取れる淨瑠璃として天神記の最古が、孰れにあるかは兎に角、義太

夫にこの種の所演あることは、何人の作かは知らず、異本天神記のあることに關心を唆つて止まなかつたが、圖らずも此程、一風變つた道行景事集から有力な證據を得るに至つた。淨瑠璃の道行集は通例一冊ぎりのもので、寶永六年古播磨風筑後丸は、二十一曲を上下二卷の形式に收めてゐるが一冊の合綴である。正徳元年の鸚鵡が袖三卷は九十曲の集大成であるが、筑後掾が受領十周年に相當して、還曆祝賀の表意をかねた刊行物なるが故に珍しい。私が求めたのは半紙板八十丁、下卷のみなのを遺憾とするが、種目十九、曲數三十一、もし中巻があつて三卷物とすれば、優に鸚鵡が袖に匹敵する分量のものである。題簽磨滅のため書名は明かならず、ことに缺本であるから斷言は出來ぬが、所收の語物が元祿十四年の會我五人兄弟を最新とし、他は同十一年以往、貞享に溯るものに限られてゐるのを見ると、上梓年月は前二書に先ち元

祿末年頃か、臆測を宥さるれば受領當時の記念出版ではないかと考へる。中に近松の天神記と全然詞章の違つた道行を載せてゐる。道行一段のみ作られる苦もないので、ここに別種の天神記の存在を確かめられるが、配列の順序を以てすれば、その上演は貞享年間らしい。次に目録並に奥附の版式と共にその全文を掲げる。

下之巻 目録

ぶ 會我五人兄弟 小袖紋つくし (八行)  
 ゆ 同 古今兵者揃 (同)  
 同 同 虎少將道行 (同)  
 う 同 記念おくり (同)  
 も 百日會我 傾城請狀 (同)  
 同 同 虎少將道行 (十行)  
 う 同 禪師坊三部經 (八行)  
 祝 同 歌仙の段 (九行)  
 同 同 後室道行 (十行)  
 今川了俊 千鳥の前道行 (同)  
 四天王西國順禮 熊野路道行 (同)  
 小野道風 むらさき姫道行 (同)  
 京女商人 みち姫道行 (同)  
 も 廿日正月 忠信大黒舞 (同)

も 一心五戒魂  
 松風村雨  
 も 同  
 月見今様柏木  
 佛凱陣八島  
 た いろは物語  
 佐佐木大鑑  
 天神記  
 ゆ 大友眞鳥  
 う 頼光跡目論  
 た 忠慶  
 祝 同  
 う 盛久  
 佛 同  
 祝 同  
 文覺地藏舞 (十行)  
 司の前道行 (八行)  
 錢獨樂つくし (同)  
 義綱月見の段 (同)  
 辨慶勸進帳 (同)  
 大師歸朝獅子の亂曲 (同)  
 待宵時雨道行 (同)  
 菅丞相舟路の道行 (同)  
 菅丞相傳記 (同)  
 鹽竈の段 (九行)  
 一の谷名所つくし (八行)  
 菊の前道行 (同)  
 太刀の銘つくし (同)  
 曙馬士歌 (同)  
 法正覺道行 (同)  
 比丘尼地獄の繪解 (同)  
 源氏大系圖 (同)

右此本者以太夫直傳寫之文句音節悉校合加秘密今開版者也

竹本筑後棟

大阪御堂筋  
北久賣寺町

正本屋  
仁兵衛 印

天神記

菅承相舟路の道行

フシ心つくしの。うき旅路。地中親ウ子三人ウ思はずも。配所に赴きウたまひぬるフシヲク無實の罪こそ悲しけれ。中ウげにや思へばウこれとても濁れる世にしすむからの。身の上にかにウなりなんと。フシ思ひのハル袂中いつとてか。かわきもあへぬ泪の露。あだにはかなきフシ世の中の。中樂みつきてウ悲みのウヲクリくるまをきしるウ鳥羽駁ヲクリ牛をウ牽きぬる地ハル賤の男も。暮れてよどのに上伏見とや。大内山をあとに見てフシ名残。ハルおしほの山櫻。嵐にちりてウ川の瀬に。フシ流れゆく。中我は水屑とウなりぬとも君柵とウなりてさて。止めぬ名のみウせきどの宿ハツミ泊りも果て。ぬ旅の空。中うき身はいつもウまじはりの塵の。浮世のウ芥川フシ風の。まにハルまにたつ浪の。中昆陽の池水澄み濁る。フシ中ウ世はならはしのタルわざなれや。フシハル烟をかづく尼が崎。中あたりをとへば難波瀆スエテ短き葦のふしのまも。キンあはでや人に故郷を。中隔つる雲のウ浪寄するハル和田の。岬のキンタ風にこれより。お船に召されつつフシ海原遠く漕ぎ出る。ハルフシげに古へは。地中錦の續ウ蘭の楫。桂の棹をハル引かへて。中さもうかりけるクル捨小舟。長地ウうきにも慣れしわざとてやウ旅泊の思ひウ詩に作りウ和歌を詠じて中御心を。はるかに見えしウ山山の冷泉雲井に。つづく。

ハルウ布引や。中すぐなる御代にさかて川。濁る佞人クルすみやかに。こまのはやしに繋ぎ止め此身をやすく須磨明石。浦浦過ぎていきの松スエテまつとはなしに明暮れて。フシすでに配所も近づきぬ。太夫地色ハルハ然るところに追手の風に梅のかをり紛紛たりツレ中ハ人々怪しみハル見てあれば二人ハ御所にありける好文木。東風に従ひてウ雲路はるけく飛び來り。船中にウとまりしはフシ奇態不思議といひつべしツレハルウハいづれもはつと感じける。太夫ハ菅承相色御覽じて。詞扱もやさしや故郷に残りし梅の念通じて我に従ひ飛び來ること非情ながらも奇特やと二人ハルハなほしも御絲愛淺からぬ宰府の飛梅これとかや中二人ハルハ心なきウ草木とはいひ中ながら。梅は主をウ忘れざるに。ウ松はかひなきウものなりと二人ハかくぞすさみたまひける。フシ梅は飛び櫻は。ハル枯るる世の中に。何とて松は。ウつれハルなかるらんと。詠じたまへば不思議やなはるかの。沖に見え中けるは。キンハルフシそれかあらぬか太夫中ハハいやあれ二人ハルハ松の葉風にひらり。ひらりと吹かれ。吹かれてウ來りしがフシ同じく船に止まりぬ。中今のタル世にする神木のウ老松とは色これなめり太夫中ハかほどに心あるものをスエテ恨みしことの悔しさよ二人中これを配所にウ植ゑおきて。ウ少しはうきをクル慰まんと御心。ウいさましくキン浪路をわけて御船は程なく宰府に色著きたまふ。ハルウ末世なれども詠歌の徳神道。秘密ウ神變自在ことばを。つくすに暇なし

目錄、頭註の祝、佛などの漢字は、祝言、佛事の略稱であらうが、今様柏木にのみ特に月見と區別したのは何故か。假名文字のぶ、ゆ、う、も、た、ゆの類に至つては何を意味するかちよつと分らぬ。變つた外題には、四天王西國順禮や、京女商人など、義大夫の語物としての初見である。

近松の天神記は御臺所道行と題して、菅秀才と兩人のあとおひであるに對して、これは親子三人配流に處せられることになつてゐるが、「錦の鱧、蘭の楫」など近松と同一句も見える。梅松の異瑞や、「梅は飛び櫻は枯るる」の歌が、虎卷菅

### 榮三、文五郎に

## 『朝日賞』授與さる

國家社會の進展に對して偉大な貢獻をした人々を表彰するため朝日新聞社が創設した「朝日賞」の昭和十七年度受賞者が去る一月十四日發表されたが、何れも大東亞戰下、國民士氣の昂揚に貢獻した美術家、音楽家、文學者、科學者などの内に、文樂座人形部の双壁、吉田榮三、吉田文五郎の名が見出される。榮三、文五郎の名技は均しく世の認めるところで、前者は主として立役を遣

永相と同じく顯はれてゐるのによれば、同篇の出でない。從つて假りに彼の典據を天神御本地とすれば、これこそ近松の天神記に最も近き關係にあるべくその完本の出現を期待したい。

因にいふ。若月保治氏編の操淨瑠璃年表に、所屬不明として、貞享頃の天神御出生記と享保四五年頃の天神記とが擧げられてゐるが、前者は加賀掾の天神御本地の外題替、後者は同門弟の天拜山顯書窟と同作なるかに疑はれる。

うて寫實派とも云ふべく、後者は主として女形を遣うて技巧派とも云ふべく、兩々相俟つて對照の妙を得て、絢爛たる舞臺を生んでゐる。古典藝術を護り、後進の哺育に努め、あるひは「最後の華」でもあるかも知れない今日の活躍を見せるに至つた功績は大きい。二人とも七十有餘歳の老齡ながら、なほ壯者を凌ぐ意氣を以て激しい勞働とも云ふべき舞臺を勤めてゐる。この優秀な演技と、舞臺生活六十年の功績に「朝日賞」が贈られたわけである。

因に右の「朝日賞」受賞記念として文樂座の二月興行には「千本櫻」の道行が、榮三の忠信、文五郎の靜御前で上演される。